

平成 23 年度 第 1 回礼文町生物多様性地域戦略策定検討委員会 議事概要

- 日 時 平成 23 年 6 月 3 日（金） 9:30～11:00
- 場 所 礼文町役場 3 階 大会議室
- 出席者 <委員>
小野委員長、宮本委員、村上委員、河原委員、高橋委員、杉浦委員、佐藤委員、
庄子委員、八巻委員
<オブザーバー>
北海道地方環境事務所、宗谷森林管理署、宗谷総合振興局保健環境部環境生活課、
礼文町建設課
<事務局>
礼文町産業課、株式会社ライヴ環境計画

1 委嘱状の交付

2 委員長挨拶

- 小野委員長より挨拶。

【自己紹介】

- 委員及びオブザーバー自己紹介。

3 議題

① 平成 22 年度検討委員会の概要

- 事務局より資料説明。

② 平成 23 年度検討委員会の予定について

③ 礼文町いきものつながりプロジェクト概要について（2011.6.3 版）

- ②、③併せて事務局より説明。

（事務局）

- 今年度は戦略としてとりまとめることが目的となる。
- 冬季にかかる第 3 回、第 4 回の検討委員会については、気象条件や検討委員のスケジュール調整のしやすさ等を考慮し、事務局含め、礼文島在住委員が札幌に赴いて会議を開催することを想定している。
- メールや書類のやりとりを随時行いながら戦略のとりまとめを進め、11 月の時点で 8～9 割の項目・内容整理が進んでいる状態を目指したい。
- 本日配布したガイドラインの内容については、後日、事務局からとりまとめに関する問い合わせ・お願い等を改めてさせていただく。

- 戦略のタイトルについては、プロジェクトというタイトルとするかどうかも含めて、今後意見を伺いながら決めていきたい。
- 戦略をつくることも大切であるが、アクションプランを実行・継続していくことに主眼において進めていくべきと考えている。今回策定する戦略は足がかりとして捉え、アクションプランを実行・継続する中で戦略を磨き上げていくことに力を注いでいきたい。礼文町では、「リボンプロジェクト」（バッジ購入費を寄付金として扱い、これを原資に関係する団体への支援や必要な園路の整備等に充てる）、島を訪れた方への感謝の意味を込めたポストカードの配布などの取り組みをすでに開始している。

(高橋委員)

- 礼文島在住の委員は、観光のシーズンオフにあたる時期に予定されている札幌開催の検討委員会には参加していただきやすいだろう。
- 研究者は側面から支援する立場であり、島の方が主役となって進めていくために、興味を惹きつけるよう、島の方との情報交換をしていただきたい。

(河原委員)

- 島の人の意向がどのようなものであるか、が最も重要である。昨年度の検討委員会においても、“将来どうしたいのか”という意識調査の必要性が議論されていたが、その後進展はあるか。

(八巻委員)

- 本戦略策定とは別のプロジェクトにおいて、「過疎地域における地域資源を活かしたまちづくり」に関する文部科学省の科学研究費プロジェクトを進めている。9月に研究者メンバーが礼文島に来島し、現地を確認するとともに、島の方と意見交換をしたい、という意向をもっている。仕事として関わっている方だけでなく、若い世代を含めて島の資源について議論したいと考え、将来を担う高校生の参加を得られるよう準備を進めている。ここでの議論の内容や結果は、本戦略にも反映させていくことができるのではないかと。

(庄子委員)

- “生物多様性と島の人々の生活との関わり”の視点で、事務局と相談しながら、島の方々への聞き取り調査の実施を検討している。
- “地域と生物多様性とのつながり”について、その結びつきを直接感じることは難しいだろう。しかし、直接的には認識されていなくても、日頃の生活の中で自然資源として利用しているものは生物多様性につながるだろう、と考えられる。島の方々への聞き取り調査などを通して、“礼文島の自然環境の何が重要と感じているか”を明らかにしながら、生物多様性と生活をつないでいくことができれば、と考えている。
- 屋久島では、地元の高校生を通して島の大人世代に聞き取り調査を行った例がある。研究者が聞き取りを実施してもなかなか聞くことができない内容が、そのような手法をとったことでいろいろと明らかになった。

(河原委員)

- 第2回検討委員会のタイミングに合わせて、意識調査の結果についてもある程度報告していただきたい。

(佐藤委員)

- 生物多様性はわかるようでわかりにくい。生物多様性とはなにか、について、ざっくばらんに話をすることができる場、例えば、町民と研究者の座談会のような場があってもいいのではないか。わかりにくいことを、少しでもわかっている研究者が町民に伝える機会も必要である。
- “礼文らしさを守ること”が戦略のテーマと考えると、“礼文らしさ”とその具体的な内容、あるいはアクションプランとの繋がりが遊離している面がある。漁業、観光などに関係する人を含めながら、礼文らしさの中身をお互いに話し合う、理解し合う、共通認識にする、ということを経段階から始めるべきではないか。島の方が中心となるべきであるが、外からみた礼文島のすばらしさについて外からの意見を知ることも必要である。

(八巻委員)

- 昨年、島で開催された生物多様性保全に関する講演会について、どのような方が参加されたのか、参加された方の反応はどのようなものであったか。
- 礼文島自然情報センターで実施しているフォーラムを支援する形もあるのではないか。

(中野自然保護官補佐：オブザーバー)

- 昨年の12月上旬に、「礼文町町民学習交流会」において、島の方に生物多様性について説明させていただいた。「生物多様性という言葉は難しくてわからない」という声があったため、礼文島での例を出しながら、生き物同士のつながり、そのつながりが失われることによる生活への影響などを説明した。
- 旅館経営者や主婦の方など一般の方の参加もあった。普段外に出て花や鳥を観ているような人が多かった印象である。

(村上委員)

- 今年度は、冬季にネイチャー礼文を利用したミニフォーラムを数回開催できれば、と考えている。

(事務局)

- 興味のある方だけでなく、参加する方の裾野を広げながら、講演会やフォーラムのような場を通して、いきものつながりに関わる意見交換をスタートさせることがアクションプランの根幹になるのでは、と考えている。
- 本戦略に関する会議は今年度限りとなっている。その後の意見交換の場として、「礼文島高山植物保護対策協議会」などの既存の会議・集まりをうまく組み合わせていくべきと考えており、委員の方の意見も伺いたい。

(佐藤委員)

- 研究者は礼文島を訪れると2泊はしていくであろう。その滞在中の時間をうまく活用し、一度の来島で2つ、3つの目的を果たさせるようにするなど、検討委員を講演者とした町民との意見交換会のような機会を設けてもいいのではないか。戦略を策定していく過程において町民にいろいろな考え方や知識を提供し、また町民の意見を集めるための工夫はいろいろ考えられる。

(河原委員)

- いきものつながりについて、一般の方にもわかってもらう努力も必要である。「うすゆきの湯」など、より多くの人が集まる場所にポスターやパネルを掲示するなど、少しずつでも一般の人の目につくようなデモンストレーションをしてはどうか。

(高橋委員)

- 講演会のような1回限りのイベントでもそれなりの人は集まるが、一定期間の展示という形であれば、自分のペースで何度でも見て、考えることのできる学習手段となる。礼文町でも、郷土資料館の常設展示の一角を1~2ヶ月での企画展示用のスペースにして、いきものつながりをテーマとした展示を行い、観光客も含めたいろいろな方に見ていただくのも効果的ではないか。
- 礼文町の人口減少が激しく進んでいることに驚いた。その一方で、年間10万人を超える観光客が礼文島を訪れている。島への移動に前後1日かけてでも観光客が訪れる礼文島の魅力は何か、を考えることも重要である。
- 人口や観光入込客数などのわかりやすい数値を用いて島の状況を示しながら、島の人に危機感をもって考え、取り組みに参加していただくよう働きかけていくことが必要ではないか。

(委員長)

- すでに人口は3,000人を切っており、その段階で大きな危機感をもっている。島に雇用の場を確保しないと、若い世代が島に残れないだろう。漁業の後継者がいない状況もある。生物多様性を考えなければいけない一方で、島の産業についても考えなければいけない時期であると考えている。
- 町民が何を感じているのか、を知らない限り、アクションプランに結びつけることが難しい。9月の会議に意識調査の結果を反映させていく方向で進めていきたい。

(八巻委員)

- 人口減少に伴う物流・インフラの減少、さらに観光客の減少という悪循環が生まれる。
- いきものつながりを担う島民の減少、いきものつながりを考えていく上での基盤である観光業の先細りといったことも考えると、人口減少社会の中で、基盤となる観光業をどうするか、高山植物の保全・利用を担っていく人材をどのように確保していくか、というのも大きな問題になるように感じている。“島の人口減少にも目配せした戦略策定”という視点での議論も必要ではないか。

(委員長)

- 持続可能な利用ができる社会をつくることが原点にある。人口減少への対応は1つの大きな課題であり、人口減少を食い止めるような施策をとっていくことも重要である。島に住み、生物多様性の保全を担っていく人がいなくなってしまうとは、この戦略を策定する意味が失われる。

(佐藤委員)

- 生物多様性の考え方は、生物多様性は貴重な財産であり、持続可能な利用をしていくという、我々の生き方に重点が置かれたものになっている。そのため、生物多様性の保全は一部の人間が考えることではなく、“地域づくりの一環である”という考え方ができる。しかし、地

域づくりのすべてではない、と思う。

- 環境省や林野庁などとの横のつながりを活かすことを念頭におきながら、“地域づくりの中で生物多様性の分野が担うべき部分はどこか”という整理をしておかなければ、この戦略が茫漠としてしまうように感じる。

(高橋委員)

- 礼文町職員の中に、人文系の職員に加えて自然系の職員、生物多様性に関わるような専門職員、若い・熱意のある人間が1人でもいれば、観光の魅力につながるしかけづくり、研究者との連携、情報発信なども行うことができるようになり、突破口の1つになるのではないか。

(宮本委員)

- 多くの研究者が礼文島を訪れており、研究者を受け入れるシステムが町役場にあればよいと思う。来島する研究者とうまく連携して情報を集約し、その成果を観光などに繋げることができる人であればよいのではないか。

④ その他

(佐藤委員)

- 今後、今回のプロジェクト概要(ガイドライン)だけではなく、最終的にまとめる本篇の案文原稿についても、前もってデジタルデータを提供してもらえれば、論理的・科学的な修正の根拠を示しながら修正を進めていくことができる。普段から意見交換をしながら、お互いのチームプレーで作業を進めていく段取りを考えていただきたい。

4 委員長挨拶

- 小野委員長より閉会の挨拶。

以上